

黒羽芭蕉の館だより ②1

「田植え」（小杉放菴筆）

今回は、現在「芭蕉展示室」にて展示中の「田植え」（小杉放菴筆）を紹介します。本作品（掛幅）は、紙本淡彩で、本紙の法量は縦三〇・五cm×横三七・四cmです。

本作品は、左上部に「奥細道曰田一枚植て立去柳哉」と書かれていて、『おくのほそ道』の「殺生石・遊行柳」の章末尾に記される芭蕉の句がモチーフとなっています。画面には、たすきがけで田植えをする早乙女たちの姿はありませんが、長い均し棒を担いで立ち去って行く老人の姿と枝垂れ柳の枝が描かれています。柳の枝を揺らすさわやかな風のなか、農作業を終えて家路につく老人の安堵感かにじみます。

小杉放菴（1881〜1964）は日光市出身の画家で、五百城文哉の内弟子となった後、明治30年（1897）に上京し、白馬会洋画研究所で洋画を学び、未醒と号しました。大正元年（1912）には横山大観と知り合い、日本画と洋画の別を越えた「絵画自由研究所」の設立構想を発

表し、同11年には春陽会の結成に加わります。大正12年（1923）より「放庵」と号し、昭和8年（1933）頃から「放菴」としました。文人的画境による洒脱で禅味ある山水図や写実的な花鳥図など、独特の画風を創り上げ、昭和2年（1927）には松尾芭蕉の足跡を慕って東北・北陸を旅し、『おくのほそ道』関連の作品も制作しています。また、黒羽出身の石川寒巖や関谷雲崖との交流も深かったようです。



「田植え」（小杉 放菴 筆）

問い合わせ

黒羽芭蕉の館

TEL (54) 4151

彫刻

周遊 ④4

市内で作られた作品とその作者

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介し



この作品は中田原工業団地南公園に設置してあります。

4つの白御影石の上に1つの大きな黒御影石が乗せてあります。黒御影石は底面を丸くり抜いており、4本の柱に支えられたそれは、大きめの石造りのほころのようにも見えます。

側面に見える細長い溝は、石を切断した跡です。これは昔ながらの方法で、石を削る細長い道具で、まず切りたい形に点線を付けるような間隔で穴をあけていきます。もちろん、それだけで石が切れるわけではありませんので、今度はその穴の中に2枚の鉄の板を差し

光の中で

ほしの 星野 一美 日本 2004年

込みます。この板の間にくさびを打ち込んで、少しずつ少しずつ穴を押し広げていくと、やがてその力に耐えられなくなった石が穴に沿って割れていくのです。

この作品はそんな制作過程に発生する模様を、効果的に活かし、一つの作品としての統一感を演出しているように見受けられます。

作品の作者は星野一美氏、愛知県生まれ。東北芸術工科大学芸術学部美術科彫刻コースを卒業後、愛知県立芸術大学大学院美術学部彫刻専攻研究生を終了。シンポジウムに参加された2004年までにグループ展に12回参加されており、宇都宮大学のArt Promenade in Utsunomiya Universityにも参加されました。

設置場所案内図(★印)



星野 一美 氏

問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718